

令和4年度 第1回 草津市地域再生推進協議会 会議録

■日時：

令和4年11月4日（金）14時00分～15時30分

■場所：

草津市役所 2階 特大会議室

■出席委員：

小沢委員、阿部俊彦委員、阿部陽子委員、馬場委員、茶木委員、野口委員、奥村委員、木内委員、堀田委員、吉本委員、伊庭委員、佐々木委員、麻植委員、住田委員、村上委員

■欠席委員：

今井委員

■事務局：

都市計画部	松尾部長、一浦総括副部長
農林水産課	舟木課長
商工観光労政課	井上課長
まちづくり協働課	西山課長
交通政策課	福留課長
都市地域戦略課	長谷川課長、寺尾係長、山口主任

■傍聴者：

なし

1. 開会

※松尾部長より挨拶。

2. 委員紹介、事務局紹介

※事務局より、委員・事務局の紹介。

※配布資料の確認。

3. 会長および副会長の選任について

※会場より事務局提案を求める声があり、事務局から小沢委員を会長に、阿部俊彦委員を副会長に推薦。一同了承。

※会議を公開とする旨の合意がなされた。

4. 草津市版地域再生計画の進捗状況について

【事務局】

<資料2について説明>

5. その他（意見交換）

【副会長】

建替えを検討しているまちづくりセンターについて、その経過や今後の利活用についての考え方を聞きたい。

【事務局】

まちづくりセンターの建替えについては、老上西学区を新設するとともに、これまで、笠縫学区、常盤学区、志津学区の順に建て替えを行ってきて、現在、山田学区と笠縫東学区の建て替えを検討しています。

利活用については、例えば常盤学区を例にすると、まちづくりセンターとしての機能に農業振興機能を付加して研修スペース等を広く確保するような整備が行われました。このように、地域の特色に合わせる形で、地域課題をどのように解決していくのかという部分はまちづくり協働部、地域再生の部分は都市計画部で今後もバックアップしていきたいと考えております。

【委員】

志津まちづくりセンターについては、2階建てが基本とされる中、平屋のセンターを整備した。利用者の顔が見えるよう事務室を玄関の横に設置するとともに、ホールを設置して憩いの場を確保した。現在はそのホールでコミュニティカフェが運営されている。現在の地域活性化の取り組みとして、4つのプロジェクトチームに分かれて地域で活動が展開されている。

草津川の上流部において堤防と川床の引き下げ事業が予定されており、その中で草津川の堤防に2車線の道路が整備できるような計画になるとありがたいと考えている。

クリーンセンターのグラウンドがなくなったため、馬場町の中で3haの用地を確保して、市に要望を提出したところである。山手幹線の開通に合わせて開発が進められればと考えている。

農業振興地域についても、85%以上の農地については法人等で供用される予定となっている。

大きな市街化調整区域においては地区計画か50戸連たんに基づいて住宅が建てられるが、今後、放棄地や資材置き場、駐車場で虫食いになっているところがあり改善していきけるよう計画する必要がある。一方で、地域には工場の敷地を大きくしたいという思いを持っておられる事業者もおり、市街化調整区域におけるまちづくりの計画を一体的に

考えていきたいと思う。

【委員】

山田学区ではまちづくりプランに基づいた地域再生の取り組みを進めている。まちづくりセンターの建替えについては、実行委員会を立ち上げ、子どもから高齢者まで多様な利用者に合ったコンセプトを考えているところであり、案がまとまった段階で市との調整を行っていきたい。

地域の課題として、人材の部分で「育成が難しい」「成り手・担い手がない」という課題がある。まちづくり協議会事務局の職員にも継続性がなく、取り組みを持続させることが難しい。学区のリテラシーをどのように高めて、どのように地域を持続していけばよいか苦慮している。また、若い世代とのジェネレーションギャップを感じている。まちづくりプランの内容をどうやって補填していくのかという部分が難しい。期間を延ばしながらでも整理をしないといけないと考えており、今後も県・市と協働したまちづくりを進める必要がある。

【委員】

笠縫学区は野村、上笠、下笠という3つの地域に分かれており、そのうち下笠だけが市街化調整区域であるため、まちづくりプランの策定にあたって苦労した。転入者も多く、農業の担い手の不足や育成が課題となっている。

現在、「笠縫ツナガリ隊」というグループを形成して活動をしている。地域協働学校等と連携して農業体験を行うことで、地域の人材発掘につなげたいという意図がある。地域のお祭りについても、このグループに企画等を任せ、キッチンカー等と呼ぶなどこれまでとは一風変わった祭りが開催される予定となっている。

【委員】

常盤学区は集落間が離れている。駅前のにぎやかさと比べると寂しく感じる場所もあり、今後、限界学区になることが懸念されている。

常盤プロジェクトに位置付けられる33項目を実現することでにぎやかな学区になるよう各種施策に取り組んでいるところである。

【委員】

老上西学区は平成28年にできた新しい学区であり、これに合わせてまちづくりセンターを新設した。現状としては、小学校、学童、まちづくりセンターが駐車場を共用しているため駐車台数が足りないといった課題がある。

新設するにあたって検討した内容としては、土足で入れるようにするかどうかをかなり協議した。最終的には、メンテナンスを考えると履き替える方がいいという話にまとまった。また、センター内をスムーズに移動できるよう部屋の配置等を考えた。トイレにはウォシュレットを設置した。エレベーターを設置したが、維持管理費が高くなるので注意が必要である。

まちづくりプランに基づく活動としては立命館大学の阿部先生に協力をいただき、矢橋

帰帆島の下水処理施設としてのイメージの払拭や中間水路の利活用について立命館大学、行政、企業、地元による連携のもとワークショップを進めており、にぎわいと潤いのあるまちづくりを目指している。

今後は、公園管理者等の多くの関係機関との調整を行いながら、ワークショップで出たアイデアの実現に向けて、どのように取り組みを進めていくかが課題となる。

【委員】

地域資源を活かした産業支援の部分について、通常、プランには定量的な指標も入れるべきだと思うが各学区のまちづくりプランにはそのような指標が見られない。また、産業振興をするという面では、外貨を稼ぐのか、域内でお金を回すのかといった視点が必要になり、その中でどのような取り組みをするのかというところがポイントだと思うが、このプランにどのような考えがあるのか聞きたい。

【事務局】

道の駅草津については、平成15年4月に供用開始し、平成18年の33万人の入込客数をピークに、コロナウイルス感染症の影響等もありながら、現在は年間20万人ほどまで入込客数が落ち込んでいる。市としては県内でも比較的交通量が多いところに位置しているため、多くの方に利用してもらいたいとの思いがございいます。

現在、施設の老朽化が進んでおり、交通量に対して駐車場の足りていない状況があるため、施設のリノベーションにあたっては駐車場の拡大も考えていく予定であり、機能・魅力の向上に向けて、道路管理者である県と調整しながら検討を進めていきたいと考えております。

具体的な入込客数の目標としては、ピーク時の33万人まで戻したいという視点と、それ以上に多くのお客様に来ていただきたいと考えております。

【委員】

そのような数値は入れないのか。老朽化と駐車場の拡張が第1ステップとして、これだけでは入込客数は戻らないので、プラスで魅力が必要になるため、第2ステップ・第3ステップを考えていくことになると思う。そのような目標を共有することで地域の協力も得られるものとするが。

【事務局】

まずは、まちづくりプランの中でリノベーションが必要であると位置づけ、個別の目標については、リノベーション構想を担当部局が検討しているような状況で、ご指摘のとおり、いくつかステップを想定しており、まずは駐車場の拡張や施設の改修を行い、次に農業観光物の販路の確保などを進めていく予定でございいます。

草津市版地域再生計画に定める3つの方向性については、草津市では、まだ人口が増加しておりますが、常盤学区や山田学区は人口の減少局面を迎えているといった状況があり、住み慣れた地域で住み続けてもらえるまちづくりが必要であるということで3つのキーワードを設定いたしました。生活するうえで必要な施設（拠点）を核として整備し

て、コンパクト・プラス・ネットワークの考え方のもと、駅を中心としたまちづくりを進めながらも地域の拠点をネットワークでつなぐことで一定の利便性を確保していくという方針でございます。

産業の振興については、入込客数を増やして地域の中でお金や資源を循環させていくというのは学区だけで考えていくにはなかなか難しい問題で、市域として考えていかないといけない大きな課題であると考えますが、このまちづくりプランの主旨としては、「まずは地域住民が自分たちのまちの産業や魅力、誇れるものを活かしたまちづくりを考えよう」という意味で産業振興・地域振興を進めていこう」という視点で位置付けており、その中で住み慣れた地域で住み続けていただけるようなまちづくりを進めていくといった整理を行ってきた経過でございます。

【委員】

数値化はしないというものか。

【事務局】

数値化は難しいと考えております。

地域再生については、行政だけではなく地域や民間の力を借りながらやっていかないといけないという認識の中で、まずは方向性を示すために整理したものでございます。

【委員】

道の駅については、外貨を稼ぐというところで数値化できるところはしていかないと考える。農家の視点に立つと、道の駅に出店することでどれだけ収益につながるのかということが見えれば、農家にとってもうれしいし、一次産業の活性化にもつながるのではないかと思う。戦略的な拠点については数値化を図られてはどうか。

【事務局】

ご指摘のとおりと考えます。県内には20か所ほどの道の駅がございまして、だいたい年平均で8万人程度の入込客数があると聞いておりますが、道の駅草津の前の交通量を鑑みて、本当にそれだけ少なくて良いのかという議論が始まっており、数値化に取り組んでいかないといけないと考えております。

【委員】

道の駅せせらぎの里こうら（甲良町）では、プランを作成して振興を進めることにより、収益が1.5倍になったと聞いている。このように具体的な結果や数字が出てくることで予算を確保できるようになるといった側面もあると思うので、ぜひ取り組んでもらいたい。

【委員】

矢橋帰帆島や烏丸半島はポテンシャルを有しており、開発を行うことで収益化が可能であると思う。オートキャンプ場を整備する等、利活用を検討してもらいたい。
草津市都市交通マスタープランの人口動態予測が2020年（令和2年）頃から人口が減るという推計になっていたが、最新の予測によると2040年（令和22年）頃まで

人口が増加する見込みとなっている。数値の見直しが必要になるのではないか。

【事務局】

来年度の草津市地域公共交通網形成計画の見直しに向けて準備をしており、最新の人口動態をふまえ、地域住民の移動手段をどのように確保するのか、公共交通機関等にも協力いただきながら、検討を行ってまいります。

【委員】

道路整備等の事業を行う際に県や国に財源がないという話を耳にするが、計画やビジョン等を作成して、お金を付けてもらえるよう市としても頑張してほしい。

市内には右折レーンを作るべきと思うところも多々ある。道路規制や道路交通について、お金をかけずに改善できる場所も考えてもらいたい。

【委員】

まちづくりセンターの整備にあたっては、市民センターのような保護者が子どもと一緒に体験・経験ができるような講座があるとよいと考える。まちづくりセンターと市民センターに機能的な住み分けがあるとは思いますが、親子や友達で通えるような視点があると人が集まる施設にできると思う。

【委員】

大学の活動として、矢橋帰帆島や中間水路の利活用について検討を行っている。先日、中間水路でカヌー体験を開催したが、アイディアの実現に向けてはイベントを継続していくことが必要であると感じた。

当日は車で来る人が目立った。今後、矢橋帰帆島や中間水路の利活用を進めていくにあたっては交通の軸を考える必要があり、土日限定で南草津駅から矢橋帰帆島までまめバスを通すなど実験的な取り組みをすることも大切ではないかと感じた。

【事務局】

市民の多様性（ダイバーシティ）を前提に、まちづくりセンターに地域の課題をどのように集約するか、地域住民が参加しやすい、足を運びやすいセンターにするためにはどうしたらよいのか、キラリエ草津や市民交流プラザの課題や実績をふまえながら考えてまいります。

また、老上西学区のカヌー体験については、試しにイベントを開催して、実際にイベントがどのように動くのかを体感し、できるという実感を地域住民や関係者で共有することが大切であると考えています。地域住民が自らまちづくりを考えていくことが大切で、それに合わせて行政もより良い交通のあり方も考えていく必要があると考えます。

【委員】

先日、高齢者向けの避難勧告が出た際に、最寄りのまちづくりセンターに避難するようにと携帯電話に通知があった。南笠東学区のハザードマップによると、私の住む地域は50cm～100cmの浸水範囲で垂直避難をすれば十分であるが、このことを知らない人が通知を見てまちづくりセンターに避難をすると（まちづくりセンターの方が浸水

の危険が大きいため)かえって危険にさらされることになる。どのようにこの通知がなされているかわからないが、避難場所の検証をしてもらいたい。

また、南笠東学区の避難場所はまちづくりセンターと南笠東小学校しかなく、地域住民を受け入れられるキャパシティがない。そのようなところも調整が必要かなと考えている。

【会長】

事務局には担当の所属とすり合わせを行ってもらいたい。

【委員】

どこのまちづくりセンターにおいても人材育成や若者との関わりは課題に感じているように思う。そのような中で、市街化調整区域の学区については、上手に関わっていると私は感じている。

若い人材は決して地域に無関心というわけではなく、地域の資源を見つけて事業や商品に変えていくという力や意欲を持っている。活動に参加して地域と関わり始めた人はその地域に関心を持って行くという状況もあり、市街化調整区域以外の地域にも良い影響が広がっている。

まちづくり協議会の情報発信も、公式LINEを作って若い方を巻き込んでいこうという機運が高まっている。

【委員】

若者が参画しやすい雰囲気や空間は大切である。新しい志津学区のまちづくりセンターにはフリースペースがあり、これが居場所づくりに繋がっている。

まちづくりセンターを建替えるにあたって住民アンケートを実施したところ多くの若者から回答があった。現在行われている活動はずっと前から同じ人がやっているのも新しい人が参画しにくいといった声があり、参画しやすいような投げかけが必要であると感じた。ボランティアについても募集があれば参加したとの声もあった。これらの声をふまえてコミュニティカフェがあればいいのではないかということになり、カフェを運営するにあたりボランティアを募ったところ30人ほど人が集まって、いまま活動が続いている。

また、志津学区の誇れるところとはという問いには「ロクハ公園があること」という声が多くあり、それに沿うような形でロクハ公園を活用するイベント等を考えている。

自分の住んでいる地域を自分たちでどうにかしたいとの思いが住民にあると感じた。

【副会長】

まちづくりセンターの役割が変わっており、いろいろな機能をまちづくりセンターに入ればよいというわけではないように思う。

貴生川の公民館の建替えに携わっているが、公民館に入れたい機能を他の公共施設で兼ねることはできないか、やりたいことが公民館でできないのであれば近隣の空き家を活用できないかといった意見を交わしている。公民館だけを考えるのではなく、地域に何

が足りないのかという視点で考える必要がある。他の施設や公園、空き地などを活用して活動をつなげていければよいと思った。

また、草津市として湖畔沿いをどのように利活用するのかを考えないといけないと思う。大津市はなぎさ公園を一体で活用するようなビジョンを打ち出しており、近江八幡市も西の湖の公共空間をどのように活用するのか考えているようである。草津市も湖畔沿いを（民間活力を生かしながら）どのように活用していくのか考えていかないと乗り遅れるのではないかと危惧している。

学生からもあったように、施策を完成させるためには一過性のイベントで終わらず、何が課題なのかというところを探る必要があり、実験的な取り組みを広げていく必要がある。

【会長】

大学の状況を紹介しますと、コロナウイルス感染症の影響もあり、大学を出て活動したいという学生のニーズが高まっている。市内のいろいろな活動に立命館大学の学生が関わらせてもらっており、学生の成長につながっていると実感している。

最近の学生の傾向としては、積極的に外に出て何かをやりたいという学生は少ないが、何かのきっかけから地域と深く関わりを持つ学生がいる。きっかけを作ってもらうことで、学生と地域の交流が生まれていくのではないかと考えている。

大学ではR2030という目標の中で探究型の学びというものを掲げており、大学の内外で社会と関わって行動することで興味関心を広げ、さらにその興味関心を追求していくという学びを推奨している。今後、大学から地域に出ていくことが活発になると思うので、ぜひ地域の皆様にはご協力をいただきたい。

また、大学では地域と関わる新しい活動に対してグラスツール・イノベーションとして予算をつける制度を設けており、教員や職員が関わることでそのお金を担保に活動を立ち上げることもできるので、提案いただければと思う。

6. 閉会

※一浦総括副部長より挨拶。